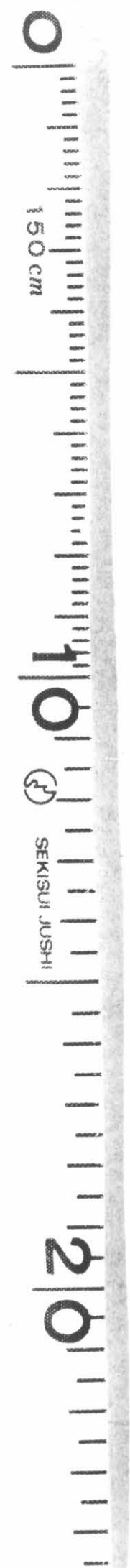


能書方 男女証料

六七

740
/
3/84





下
政為の子
冷泉為孝に入道宗家也
葉
權中納言從二
天喜十二年分

秋の草葉定まねふぬ實あるに
あはれ事より兼多しといふを合も
紙力痛みの當世の對る紙事
紙家と説くふれ有る事
朝暮の海用付たる趣

詠草并題必其堅詠草也除ふるも二首又三首も常
の事也除ふるも二首又三首も常の事也除ふるも二首又三首も常
字とてゐて實入の法則をきく時よりその料紙も
二つとて上包あり

名ふ。

四葉とても二葉とて

苑有長き

千世婦人よけしめはきこひのり
きこひもきこひもきこひも
うけあふもきこひもきこひも
いふちよひのりもきこひも

常ハ詠草中より重(堅)小ニツとて用也二つとて
ふつと重なりとて五ツ種一ちとて上包とて

同二首二首の時書板を打つ二首の時板二首の
子食と知つた事数あるを証するに後刻を更へ

名実

明時

もみらぬ山とあはれをいふとあつ
時あててくまふまうけつとあみ
もむとあつとあつとあつとあつとあつ
もむとあつとあつとあつとあつとあつ

夕時

風はくくくくくくくくくくくくくくく
なむむむむむむむむむむむむむむむ
きくくくくくくくくくくくくくくく
きくくくくくくくくくくくくくくく

寄鶴祝

あきあきあきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあきあきあき

人の賀詞として送る詠草料紙一より二より上包と
しておくりの巻として名乗をよみて送る一一首
目かきとるに餘りあること

名乗

松契子奉

糸はうへうへにうろたへる
いづち世ゆへにうろたへる

如云

賀六十壽算

すまふをくちくちいふにみせられ
まゝうへまふをくちくちいふに

是よりいふに又いふに
すまふをくちくちいふに

左にうくはもろくくを暑肝あらは料紙
一枚あま

あふくくく

あふ

春あふ

苑をわきて

名宗

右のふとく歌ち〜書る同輩或下腐つ
く〜史よと貴人〜無き事口傳ち〜とあり
本立ふ〜とあり〜

名案

霜燠落葉

落はるる庭はふりて
うのぼるうひてきりぞ
みせふ胡も

庭は西ふ梅のつこみを
れうはふ木の葉も次
とわの胡も

寄寫真

いさう—やうとふるは
ふあふさうはね中に

當世の録草也其のり料
紙のなを紙板のりも板の
おろく板板は法武ある
要る

如斯くしてまは法則とま
るなり題二つの時も其趣
取をわね近え冷泉也の
こつちおる也他流の事
あるなりと略る

望録草の録草もあふ
女房も因前あふも但名
う次妻細い法とよ記

きりふいふるふ ことばの通るはけい

女房と縁割を承くる詠草にも名を云
ゆ此の縁とも大勢とて云ふ時の男子
名と書ふ或何女子或何女又庄の妙圓
とて一時とて送る時を壁換とも云ふ
乃別紙ついても名とて云ふ自ら名を
云ふ五の字とて夫の名とて送るや又
云ふ云ふ人あぬといふ云ふ云ふ
此時を詠草といふて名とて送るす夫
別よ云わたりて送る也

壁換詠草とも云ふ女房の事も云ふ
云ふ云書つて男子も通る公實陰公
お陰陰能と云ふ云ふ夫を云ふ云ふ
あつふ豆也但女房の壁詠草の下れ
とも云ふ云ふ縁割といふ云ふ人
同和あり

女席並題忌をくつゝ題一つれ時を初志
をぬすての書は題と初男子同初

若菜

川流をくつゝ世をくつゝ

子世をくつゝ世をくつゝ

世をくつゝ世をくつゝ

世をくつゝ世をくつゝ

初恋

海をくつゝ世をくつゝ

世をくつゝ世をくつゝ

世をくつゝ世をくつゝ

世をくつゝ世をくつゝ

鶴有遐齡

わづらひきききききききききき

君のすいそ井もはるれ

こまき能と
ふき

女房の人を笑してさあめい古れさ
よ包みへ

或人の云女房の人の残るゝ歌草も二つ
てふといふ尹祥言師傳より女房の懐紙
と宴と人歌と一と述詠草とを歌と書
あつて一とよとあつて思ふへ一と堅
撰詠草懐紙と一とて等女房の人の
残るゝ名をわぬ別々四つは書紙
何字はとにふつてなと書と名と
送るを略とて事やつても名わぬ
とてわぬと

四行抄の口書

何子

人何んか

此五文の字を依るを
つとめて成る一なり
同五文の字の
白二三字の字
なり
此何んか
なり書くなり

何子

霜慍落葉

女房は涙割なまふ
みそあひしきあはれ
かやうに思ひに

おらにきく庭のこの
秋はあふつゝして
みせふ秋志を

庭のおふ秋の
みせふ秋志を
とねはあふ秋

寄山鳥恋

おふあふ秋の
みせふ秋志を
よあふのこふ秋

寄松祝

と北より来る

松乃みづもえ

とあられ
は

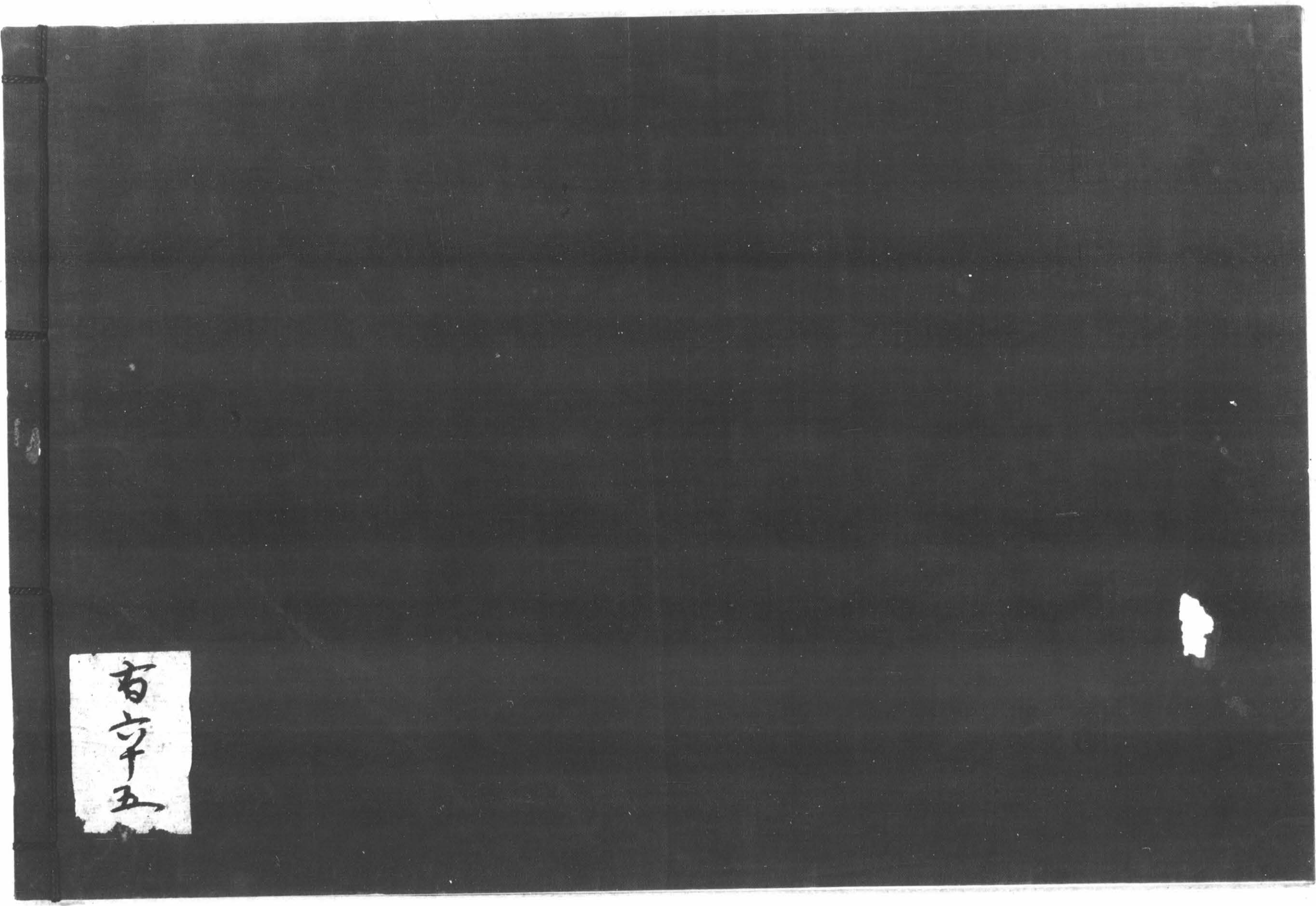
今ひとほの

とほつた

より

又いつかあつた
是の女房れ人を
知るはまはあつた
あつたあつた
あつたあつた

九州大學圖書印



古
字
五